

受講番号 18010 学校名 岡豊高等学校 氏名 小松 由里

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 普通科ビジネスコース3年生 生徒数 39 名

科目名 リーディング 単位数(授業時数) 4 時間 使用教科書名 Surfing English Reading 文英堂

クラスの様子・特徴

ビジネスコースの3年生ということでカリカリと机に向かうことが得意。簿記など、計算機片手の地道な作業を黙々とすることに慣れており、英語も板書中心の授業の方が良いという思いがある。プリントにある英文をすべて日本語にして、というリクエストも出る。

問題の確定

静かに板書していれば、授業が成立していると思っており、英文和訳以上のことを面倒だと思っている。活性化が必要。

予備調査

A 授業の観察

単調な板書形式が好きなので、ペア活動や音読に抵抗があるようである。女子の5、6人は新しい活動にも取り組みがよいが、10人の男子の中には深刻な英語嫌いが何人もおり、拒否反応を示していた。85%の生徒が英語がしゃべれるようになりたいと答えた。

B 生徒による授業評価

個々の新しい活動はペア活動が多かったが、だんだん慣れてきたらしく、アンケートでもペア活動が好きでも嫌いでもない、という者がほとんどだった。英単語を読むこと、英文法など、英語自体はすべて難しいので嫌い、という意識が大半を占め、評価は低かった。

C 学力データ

英検3級の整序作文6問を解かせたところ、37名中4名が全問正解、同じく4名が全問不正解であった。4問以上正解が13名なので、3割ほどは3級程度の力があるかもしれない。1名が今年準2級に合格した。共通テストでは、進学クラスと相当の開きがでる。

リサーチ・クエスト

リーディングを楽しませるにはどのような指導をすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

バリエーションをつけた読み方で、音読をより楽しめるのではないか。

実践1

ホーム主任の声色を真似たり、細木数子読み、小泉純一郎読み、安倍晋三読み、と挑戦したかったが、羞恥心に勝てず、実現しなかった。教育相談の研修で習ったゲーム(馬太郎、牛子:ペアが手を握ったままストーリーを聞き、Aさんは馬太郎、Bさんは牛子という単語が聞こえたら、相手の手の甲を叩いてよい。)を取り入れてみたところ、日頃取り組みの悪い生徒もよくやっていた。3人組にして1人に読ませることもできる。

検証1

馬太郎、牛子のゲームでは、キーワードをTomとHeに変えただけだったので、英語が苦手な生徒も取り組むことができた。瞬発的な動きがおもしろさを生むゲームなので、文を聞いて反応するようにアレンジするのは難しいと判断し、単語止まりにした。文を最後まで聞くゲームにするには、True or Falseなどで、Aさんは英文がTrueのとき、BさんはFalseの時相手の手の甲が叩ける、とすれば、成立する。

仮説2

自分の書いた物を見られたり、読む声を人に聞かれることで緊張感を持たせ、学習意欲を向上させることができるのではないか。

実践2

小テストを行うとき、出席番号や氏名を書かす、本人だけにわかるトレードマークを書かせた。答案をUピン状にまわし、人の物を採点する。クラスを越えて採点するときは、廊下側から2列目の前から3番目なら2 - 3とだけ書き、別のクラスのその席の生徒に担当させた。音読指導では常にペアを組ませ、1分間にどこまで読めたか、パートナーにスラッシュを入れてもらった。

検証2

無作為に決められた相手に採点させたり、作業の続きをさせることは、能力が同程度の時はいいのだが、そうでないときは、片方が退屈したり、困惑してしまう。音読をペアで行い、相手の読みについてコメントさせることは、たとえ形式的な評価を書いたとしても、一斉読みして何人が読まずにやりすごすよりはよかった。12月に調査したところ、音読が好きになったという回答は残念ながらなかったが、音読の声が大きくなったと答えた。

仮説3

同じ英文でも目先を変えて何回も見せることで、気づきや注意力が高まるのではないか。

実践3

シャドウイングは本来英文を見ずにやることに意義があるが、あえてスラッシュ改行で、日本語訳付きのワークシートを用意した。1回は何も見ないで自分がシャドウイング、1回はパートナーがシャドウする間、耳と目の両方で黙って確認する。教科書6ページ分を区切らずに印刷したものをパートに区切らせたり、日ごとに区切らせたりもした。どこを強調して読むか、強調箇所の文字サイズが大きくなっているプリントも使ってみた。

検証3

板書大好きだった生徒たちがシャドウイングに出会い、「私、シャドウイング大好き」と言って取り組んでくれた。毎回クラスの半数が読み、残りの半数がチェック役を果たしていることで、授業が活性化した。しかし、1学期続けると飽きてきたので、2学期からは、聞き取りのビンゴ、英文起こしのビンゴ、意味取り、一分間読みなどが両面印刷されたシートに切り替えた。ビンゴはどの学年にも人気があるのには驚かされた。

研究の成果

今回の研修を機に、生徒の変化を記録する態度が改善され、新しいテクニックが開発された。特に、8月の研修のあと、新学期に「さあ、何をやろう、いろいろやってみよう」と、授業が楽しみに思えたのは何十年に1回の高揚感だった。ところが、教師ばかり一生懸命になり、生徒の気持ちがついてこず、新しいことをやろうとすると、「また、何をやるつもりだろう。普通にやってくれればいいのに」と冷めた態度も感じた。高校英語が初めての1年生を対象に研究し、3年間続けられもって成果があるだろう。どの先生に変わっても、板書だけで終わる授業はない、という意識が必要。

今後の授業改善の課題

無難にやっていた授業に疑問を投げかけ、まだまだ改善の余地があるのでは、とアイデアを練ることは楽しかった。しかし、新しい小技は浮かんだが、それが生徒の英語力を伸ばすというところまではいかなかったと感じている。3年生は進路決定したあと、生活態度が急変し、秋までのような取り組みが見られなくなった。授業の小技以前に、生徒にやる気を与えられる教師になること、大技を持つことが大きな課題である。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-866-1313

電子メール

yuri_komatsu@kt2.kochinet.ed.jp